

総合討論

●一司会（黒川） この2日間、私としては非常に面白くて、面白くて、そればかり言っても仕方がないですが、そのような討議が続きました。日常、いろいろなことを考えるわけですが、その微妙なややこしいことを、こねくり回しながら論じることが、はたして本当に人に通じているのかなと、不安に感じたりもするわけです。

しかし、孫歌さんをはじめ、皆さんのお話をうかがって、お互いの母語の違いを超えながら普通の話ができていることに不思議な感じさえ覚えました。また、私自身ももう少し気を引き締めて仕事をしていかなければいけないなという気になりました。

なぜ、言葉が通じるのでしょうか。竹内好には、沈黙のなかに浮かぶ言葉というとらえ方があります。思考があって、はじめて言葉がつくられる。この二日間のわれわれの討議にしても、それぞれの考える場所は違いますが、各人がそうやって考えてきたことだから、お互いに考えていることがわかる。そのことが確かめられた両日でもありました。

先ほど孫歌さんは、歴史学は単なる文献学ではなくて、もう少し心の強さが必要だと言われました。歴史という水中に潜って問題を自分の手のなかにつかんで息を凝らして上がってくる、そうした気力こそが学問にも必要だということでしょう



◎総合討論司会
黒川 創 氏〈作家〉

う。

では、役目柄として、個別の発表について、私なりにいくらかコメントを付け加えさせていただきます。

一番若いパネラーの岡山さんの話をうかがうと、進歩に対して立ち止まる文体に、15歳くらいのときに出会ったと。そのとき、はっきりそう意識されたわけではないのしょうけれど、その竹内訳による魯迅の言葉のリズムが自分のなかに残って、その意味を19歳、20歳で自覚していったと。訳者として最初に出会った竹内好が、気がついたらそこにいる。これは私にとっても納得のいくとらえ方です。

この世界では、さまざまな世代の者たちが、1つの時空間を共にしながら生きている。異なった世代のなかから、竹内という人物に、時代の気配、生き方の気配を感じる人が現われたことに励まされました。

竹内の恋愛体験に、岡山さんは、竹内の内部で進歩の既存の価値が転倒する瞬間を見たわけですね。進歩という時代の翼の上に乗っているだけでは、内的な発展を自分のなかにつぐれない。例えば、憲法に対して、与えられるものをただ受け入れるよりも、それを受け入れる前の「掙扎」「あらいがい」、それが自分の体をつくっていくのだということと、岡山さんの着眼は照応しているところがある。恋愛の破綻がその相手への感謝として自分のなかに残り、それが人生の転機になる。そこに岡山さんは竹内の思想の発展のありかたを見ているわけですね。

個人と時代が結び付かないと、ものを考えていく根拠、地面に足がつかないようなことは誰にで

もあると思います。けれど、同時に、この関係が壊れる場面こそが、人がものを考える場所でもあるということですね。恋愛という極めて個人的なもの、世界と自分とのかかわりが対になって、岡山さんの話から表れてきた。

松本さんは、竹内がとらえた、あるいは竹内が語る中国は、ある意味では理想化された観念にすぎなかったのではないかと。にもかかわらず、彼の戦争をめぐる認識には、今のわれわれと世界との関係をより深くとらえる糸口が含まれているであろう、と。これは批評としては当たっていると思います。

ある点では、これは薛毅さんの言及でもありました。竹内の中国像はリアルな中国像ではなく、そこで語られた中国を通して竹内は日本批判を語ろうとしました。ただ、ここで残る問題は、文学者としての竹内好は、そういう錯誤をきわめて意識的にやった人間だったということです。

私は、小説などを書く人間ですが、こうやって実際に書いていると「文学とは……」ということがとても言えなくなります。そうした議論がとても口幅ったいというか、生きた言葉にならないと感じてきます。

竹内好の場合は、文学をもう少し違う意味で考えていました。先ほどの孫歌さんの言葉で言えば、文献学でもなく、あるいは学者の上に「文」が付いた文学者という意味でもない。竹内好が魯迅について考えた戦争中で言えば、そのとき彼は、時空間としての牢獄のなかにいるわけですね。そこでは、進歩や革命の手だてとしての文学、あるいは魯迅を語ることはできない。だが同時に、それを語ることができないだけではなくて、むしろ、そんなふうに語ることができないことを手だてとして考えようと、それが彼が「文学」という言葉によって表明した態度なのだと思います。だから、「動」があって「反動」があり、「革命」があって「反革命」があるという、そういう位置取りで彼の「文学」は価値判断が分かれるものではない。

むしろ、その閉鎖された牢獄のなかにも深い井戸を掘る、そのことを方法化したいと。そこから別の道が掘り抜けるはずだという態度が、彼に、幻かもしれない中国を語らせ、また、それを自覚しながら方法を見つけようと模索させたように感じます。

だから、竹内好にとっての文学者という意味から考えると、魯迅そのものが彼にとって一つの方法であり、方法は常に誤りをも含む。それを自覚しながら、誤り方を深めるというか、そういうことがかなり意識されていたように思います。

簡単に言いますと、竹内好が自分向けの意思として到達したことは、自分自身も含めてあらゆる権力は腐敗すると。ときの文学であれ、国家であれ、常に腐敗する。それをどのように更新していくか。自分もともに失敗する。またそれを、どのようにとらえ直していくか。そういう彼のなかでの永続革命みたいなものが、『魯迅』というメタファー (metaphor)、『魯迅』という架空の対話者を相手相手に続けられたようにも思えます。

先ほどの孫歌さん、また岡山さんの話でも、竹内の読まれ方には、やはり空間的、世代的にいろいろな隔りがあるわけです。むしろそこでは、思想の隔世遺伝というか、一度、日本でも中国でも、事実として竹内が読まれなかった、忘れかけられた、そういう時期こそが、とらえ返され、そこに命がもう一度与えられる上では必要だったのだという感じがします。憲法でも、きっとそうでしょう。

読まれなかった時期を隔てて、遠景としての竹内、風景としての竹内がもう一度見えてくる。昨日、鶴見さんが、60年安保条約の自然成立のときに、「非常に静かに時を迎えた。それが1つの次への再生の時間だった」と奥さんの感想を受け取ったとおっしゃっていました。やはり、そういうことはいろいろな局面であるのではないのでしょうか。それが、今日の溝口さんの話で、辛亥革命のあと中華人民共和国の成立があつてみたいな、

そういう短いスパンでの近代的な革命観だけでなく、100年、200年という時間幅のなかで、それ全体を支える風景が干潟のようにカメラをひいたら見えてくるという問題につながる。人間の人生は70年、80年でしかありません。しかし、実際には、歴史はさらに何世代かに渡りながら考えていかねばならないし、そこでの誤解も含む受け継ぎのなかで、あるものは死んでしまうのですが、また一方では新たな突然変異みたいなものも生みだしながら、更新されていく。

いま、あまりいい時代ではないのですが、いい時代でないところから何も生まれないというよりも、良くない時代のなかにも何が含まれているのかを見る目が、同時に必要となってくるでしょう。

話がずれますが、先日、扶桑社版の『新しい歴史教科書』を初めて見る機会がありました。北海道を仕事で旅していたときに、浦幌町（十勝郡）の図書館で、採択開示された教科書を偶然見ました。率直に言って、それほど感心できる本ではありませんでした。天皇にまつわる話にこんな話があったとか、それがバラバラにまき散らされた感じで、歴史を長い歩幅で考えていくヒントとしては、あまりよくないなと思いました。

ただ、それよりも、いまの教科書は、各出版社が販売競争で、どれもオールカラーです。しかも、見ばえがするように判型も大きい。オールカラーというのは、紙質も重いですから、学校に行くときに、これを何冊もかばんに入れていくのは嫌になるだろうなと思います。

思想というのは、そこに何が書かれているのかということだけではなくて、たとえば学校教科書でしたら、その機能を考えた上で、丁寧にその本をつくっていくことでもあるわけです。その部分が、ほとんど意識もされないまま、壊れている。今日の加々美さんのお話にもあったように、そのほころびが、左翼とか右翼とか言うよりも、より広いところで社会に出てきているようにも思います。

それから、今回のシンポジウムの最後として、ここでわれわれが何を語り落したかということも考えるべきでしょう。竹内好は失敗を方法化しようとしたという話が出ましたが、どのように失敗したかということについても、さらに語るべきことがあると思います。

竹内好は、たまたま戦時下で『魯迅』を独創したのではなく、その前史もあり後史もあったはずで、『魯迅』の書き方は非常に不器用な、暗闇のなかで手探りするような書き方ですが、そこでも方法としてのモデルを、彼はその時代のなかで探したと思います。

たとえば「あとがき」で彼が挙げているのは、中野重治の『斎藤茂吉ノート』。これもやはり戦時下の晦渋な作品ですが、中野の場合、左翼体験も投獄体験もあった。だからその時代のなかで、彼はいろいろなことを自由に語るができな。そうした状況のもとで、詩人としての中野重治にとって、斎藤茂吉は非常に重い相手ですから、そこに深く重いおもりを垂らした。同じく戦時下に書かれた武田泰淳の『司馬遷』もそうでしょう。こうした時代のなかでのきわめて少数派の陣形、失敗も含む陣形が、今から見ればそこにあったような気がします。そういうことなどを今後の宿題として、私自身は感じました。

そういうことで、皆さんのまともに入っていきたいと思います。所定の時間がありますので、パネラーの方々には、ひととおりの話をいただくべきことですので、先にフロアの皆さんでお話がある方がいらっしゃいましたら、挙手をお願いいたします。

●一質問者 私は、竹内文学についてはあまり存じ上げておらず、新聞などで評論を読む程度です。今日の話のなかで、安保闘争とか文化大革命、あるいは竹内好の政治的な批判について抽象的な内容で終始したかなという感じを受けました。

最初に、安保闘争の問題についていろいろと話がありましたが、問題はやはり日米安保条約の問

題です。サンフランシスコ講和条約、いわゆる法的には日本国との平和条約、西欧型の条約でしたから、当時は全面講和か片面講和だと論争がなされた問題だったと思います。私たちが考えなければならないのは、戦後の出発点から考え直さなければ、今後の日本の打開する道はないのではないかと思います。

2番目に文化大革命についてです。私の若いころに文化大革命が報道されました。その新聞報道を通じて知る範囲のことしかわかりませんが、とにかく私自身も文化大革命について賛否を問われたら、何とも言いようのないことしか申し上げられません。

当時、抗日戦争や国民党との内戦が終わり、中国革命に参加しなかった若者たちのエネルギーが、中国の国家成立後に噴出したのではないかと思います。しかも、その内容は日本や蒋介石政権に対してではなくて、国内に対して目が向けられたのではないのだろうかと思います。国内のいろいろな階層に対する問題点があって、それに対する厳しい闘争ではなかったのだろうかと思います。皆さんは、どのようにお考えかおろかがいしたいと思います。

3番目に、竹内好の天皇制批判についてです。それなりに説明がありましたが、やはり戦争責任の問題とも関連しています。最近では、アメリカから天皇の戦争責任論も出ていますが、このような問題と憲法改正の問題とも関連してきます。このような問題について、竹内好はどのような論説をされていたのか、ご紹介願えればと思います。よろしくをお願いします。

●—司会 はい。質問というかたちでご発言願いたいと思いますが、そちらの真ん中の方いかがでしょうか。

●—質問者 名古屋在住のコンドウと言います。70歳です。諸先生方の奥行き深い話に感銘しました。中国から先生がいらっやっていますので、ごく身近な問題として、最近の日中間の国民感情

の悪化について、中国の知識人の方はどのように思っておられるのか、身近なことからおたずねしたいと思います。

それから、先ほど鶴見先生は、知識人に対して鋭く厳しい警告を発しておられました。しかし、一般大衆のほうはどうでしょうか。最近のミリオンセラーで、「大衆は永遠に成熟しない」（『国家の品格』より）という論調もあります。結局、どうしたらいいのか、ということです。明治時代からすると、やはり当時がよかったという論調も何となくわかるような気がします。したがって、結局どうしたらいいのかということになり、行動が大切だということにつながっていくのでしょうか。

中国で言えば、陽明学等々ということにもなるのでしょうかけれども、先生方はその辺りをどのように考えていらっしゃるのかを、お聞きしたいと思います。

あと感想としては、松本先生の非常に歯切れのいい話に大変感銘しました。1つにはレジュメに書いてありました岡倉天心と竹内好、その対局に福沢諭吉と丸山眞男についても大変興味がありますが、時間もないことでしょうかから、中国の先生のお話と鶴見先生のお話をお聞きしたいと思います。

●—司会 質問のかたちで、もう一人くらいどうでしょうか。

●—質問者 今日の企画を立ててくださった愛知大学の皆さんにお礼を申し上げます。松本さんに焦点を絞ります。

経済が発展すれば民主化は必須であるという話でしたが、だとすれば、現在の中国のすごく成長性は民主化に到達するということでしょうか。私はその辺りがよくわかりません。

そこで、民主化ということ具体的に言うと、政治権力の選択を民衆が握っている、つまり今の日本がそうです。主権在民の制度が制度化されていることがとても大事なことだと思います。地球レベルで見れば、そのような制度を持っているの

は、数の上ではわかりませんが、例えば、中東の近代化、民主化は「百年河清を俟つごときだ」と思っています。われわれの未熟は、いまだに政権交代をしていないことです。8,000万人の人間で、選挙が約60%、4、5千万の人が投票するのですが、相変わらず自民党が政権を握っています。そういうことで、人間というのは非常に不完全で不条理で過ちを犯すものだと思っています。それを是正するのは民主主義しかないとも思っています。あればおうかがいしたいです。民主主義を超えるものは、現在のところ見当たらないと思います。

例えば、アメリカのブッシュ大統領が国連を無視して、ドイツやフランスを無視して突っ走りました。誰も止めることができません。止めることができるのはアメリカの国民だけです。選挙で落とせばいいわけです。おそらく2年後には、その結果を見ることができると思っています。私は権力を民衆が握っているということを近代化の1つの目安にしていますが、そのことについて、松本さんは意見が少し違うようですので教えていただきたいと思っています。

●—司会 それでは、質問はそれぞれの方に選択してもらって答えていただくしかないのですが、申しわけないですが、孫歌さん、中国のお三方を代表して、最近の中国での対日感情ということについて、孫歌さんなりで結構ですので、一言お願いできますでしょうか。

●—孫歌 非常に複雑な問題です。去年の反日デモをきっかけに、中国社会のなかで対日感情はひそかに変化し始めたと思います。竹内もその1つの要素ですが、反日デモのさなかに、『近代の超克』が出版されました。一時的ですが全国で買い求められました。すぐに批判の声は聞こえませんでした。そこから見ることはできたのは、このデモをきっかけにして、中国社会は日本に対する好奇心が生まれたことです。もちろん、今の段階では、まだ状況改善とは言えませんが、この好奇心がさ

らに成長していけば、責任感と結び付けられるかもしれません。もちろん、そのなかで、もう1つの重要な問題として、中国国民の政治的な困難、あるいは政治的な素質の問題もあります。つまり、政治的な国民というものの存在は、私の見方例えば、東アジアのなかでもっとも良質なものは韓国社会だと思っています。だから、そのような意味で、中国人はこれから韓国人から何を学ぶかという課題も同時に生じます。このような課題は、ここにいる私たち3人も含めて、これから精いっぱい中国社会に呼びかけをしたいと思っています。

●—司会 ありがとうございます。松本さん、質問がいくつか重なっているところもありますが、お答えになりやすいかたちで、端的に一言お願いいたします。

●—松本 民主化の問題についてですが、私は民主化は最良・最後の理念とは考えません。現状においては、民主化をしていくことは必要最低限の手続きとしてあるのではないかと思います。これは理念というよりも手続きと考えたほうがいいのではないかと思います。

それぞれ君主制の国もあります。イギリスのように女王がいても民主主義が定着するわけです。アメリカの言い方によると、日本は天皇制があるから民主主義が根付かないという主張をしましたが、そうではありません。極端に言うと、昭和天皇は一番民主化を考えていた人です。ただそれを、天皇の指令によって民主化をおこなおうというのが昭和天皇の君主たるゆえんなのだと思います。

中国が民主化するかという問題について言うならば、今、中国政府に中国は共産党の単独独裁ではないか、ということ、このような答え方をします。「われわれは、単独独裁の国ではない。なぜならば、ほかの政党も許しているからだ」と。これは事実とすればそういうことが言えます。香港に民主党があります。香港に民主党があるということは、香港が中国のなかに回収されたわけですから、そ

の意味では、ほかの政党を許しているということになります。それは詭弁かなとも思いますが、政党の多党化とか、主権在民的な政策をとらない限りにおいては、かなり状況がまずくなっているということは、中国でも考えているということです。

今、中国は経済が好調なので豊かになっているという幻想のうちにありますが、その格差は都市層と農村層では、あるいは農民籍の人では、都市と約20倍くらいの収入の違いがあります。この問題はどこで破綻するかがわからないわけです。そのような大きな問題があります。

『中国 未完の経済改革』ということを書いた樊綱さんは、中国の農民層の収入が低いのはなぜかと考えると、これは農地のなかに農民層がたくさんいすぎるからだ。これから20年のうちに、現在60%ある農民籍の人を30%に減らしていくというのです。30%を減らすということは、約4億人の人が農村から都市に出て行くということです。今まで農村で農業をしていた人を全部都会に出して労働者にするということを考えています。これはかなり大きな危険性をはらむ問題ではないかと思えます。

そういう意味で言うと、中国の現状の経済発展はかなりギリギリのところに来ているのではないのでしょうか。石油も純輸入国になっていますし、穀物類も輸入国になっています。食料も日本に輸出をしていますが、いつまで続くかわかりません。毎年7%の耕地が減っています。そして2025年には60%の農村人口を30%に減らしていくとしたら、この4億人の食料をどうするのかということ。彼にそれを質問したら、中国よりもっと広大な耕地があって人口密度の少ないブラジルとウクライナに中国の食料は任せると言うのです。そんなことを本当に可能だと考えているのでしょうか。そういう点も話をするときりがないわけですが、それでも中国が民主化を取り入れていく、それを政治のなかにシステムとして主権在民化していく、ということは必ずおこなわれて

いくだろうと思います。

イスラム世界でもそうなっています。ただ、それに対して、民主化は軍事力によっておこなえばいいのだと、リベラル・デモクラシー (liberal democracy)、自由民主主義が一番の理想であるから、軍事力によって実施すればいいというのがアメリカの考え方、ネオコン (Neocon: 新保守主義) の考え方になっています。結果とすると、9・11テロのあと、イランから女性がアメリカの大学に留学したいと言ってもすべてカットです。イスラム系は誰も入れない、留学させないというかたちになったそうです。私の考えでは、アメリカはむしろ、自由化、民主化ということが必要であると、こんなにいい社会になるのだということ、教育によって教えたほうがずっと効果が上がります。今日明日には効果は出ませんが、長い目でみれば必ず効果が出ます。それが今逆の方向になってしまったと思います。現在では、例えばイランに行くと、テヘラン大学の学生の55%は女性です。イスラム世界では女性が抑圧されて、権利が認められていないと言われていますが、イスラム世界であるからこそ、男性は中学を出て鉄道工事、タクシー運転手の仕事もあるけれど、女性には仕事がないわけです。そうすると女性は高等教育を受けて、外国語を勉強したり、インターネットを扱ったり、テレビを修理したりする技術者になるということをするために大学に行くという状況が出てきています。

今はアメリカのユニラテラリズム、政策の立て方によって、世界がおかしくなっているということを考えますが、民主化がおこなわれていくというのは、世界史の必然的なひとつの流れだと思います。これは中国においても同じだと考えます。

●一司会 ありがとうございます。張寧さん、発表のあと、文化大革命についていくつか言及ができましたが、端的に何か付け加えることがありましたら、ご発言願えますでしょうか。議論を踏

まえて、張さん、いかがでしょうか。

●—張寧 文革这个事情很复杂。文革开始时我6岁,已经很有记忆了。我过去也写过这方面的文章,可以说我是有自己的文革经验的,而不仅仅是听说。当然,后来对文革反思时,接触的可能更多是二手资料了,似乎是属于超出自身经验之外的,但这也并不是不能和自己的经验连在一起的。那么我对文革的看法,简单地说是这样,文革既有薛毅先生说的那种,就是官员和知识分子的强势话语的叙述,但是我觉得另一面也是不能忽略的,那就是我们那个时候肉体的感觉,或者孙歌老师写的皮肤的感觉。就是说对文革是从直感方面认识的,他不是借助一个什么理论而就是打在皮肤上了,那么这个恐怕不一定要去追问他的出身是什么,哪怕他只是一小部分人受到这样的待遇,就像在德国犹太人只是死了600万,大多数日耳曼人并没有受到损害的,但你不能说那只是少数人的灾难,对大多数人来说并没有造成伤害,因此是值得肯定的。文革在政治这个层面上它肯定是有问题的,肯定是错误的,这一点我比较同意沟口先生。当然我是在日本这样说啊,当然我们是有我们自己的判断的。但是今天回过头看,完全把文革给恶魔化,这显然也是有问题的,这可能正是薛毅先生致力要做的工作,他通过竹内好的一个方法试图要做区分。中国几年前就有两种文革的说法,一种是政府的官方的文革,一个是民间的文革,民间的文革主要指的是66年到68年红卫兵造反派以及人民造反。再有就是比如我本人中小学都是在文革中上的,几乎没有学到多少东西,那么这个可以说是对一两代人都是耽误的,当然你比如说毛主席所说的,教育要革命啊,等等,这种理念,特别是看到当代中国的教育现状,似乎应该是对的。但是不幸的是,作为一个理念,在一个小的范围内作为实验是可以,但是拿当时中国是7亿人,当时中国说有7亿人啊,拿7亿人做实验就是有问题了。他应该拿动物做实验而不能拿人做实验。我再说一句,孙歌老师主张对文革先不要定性,拖延这样一个定性,那么我和孙歌老师有所不同,我认为可以定一部分的性,或者是说有一部分是可以

定性的,那么这一部分可以拿出来,在我看来,和日本的这种“圣战”、和纳粹法西斯,和苏联集中营,相比较的。但是它的另一面可以不慌着去定性,它可能有很多复杂的东西。今天也可以借助竹内好的方法来认真地看看哪些是我们可以吸取的,那么这一点也要感谢薛毅先生,他所运用的以竹内好为方法也启示了我。

●—司会 ありがとうございます。では、加々美さん、一両日にわたって司会として全体を見渡したところで、大まかな論点の整理を踏まえて簡単にお話いただけますか。

●—加々美 総合討論の時間はまとめの討論ですが、話が少し拡散してきていますので、まとめの方向に戻したいと思います。

私が言ったこととも関係がありますが、実は、抵抗としてのアジア、抵抗という方法という、態度としての抵抗といった問題は、政治との関係ではどのようにとらえられるかということ、向こうからやってくる政治、つまり政治が向こうから来てしまう、だから、私たちの命を奪い取ろうとするかのように脅威を持って向こうからやって来ます。

それはどのようにとらえられるかということ、しっかり肉眼でとらえられます。あるいは皮膚感を持ってとらえられる、そこまで向こうからやって来てしまいます。

事例をあげれば、1950年代末から1960年代に日本が経験した水俣闘争とか、三里塚農地強制収用反対闘争とか、こうしたものを私たちは抵抗するアジアと二重写しにして、水俣を見、成田を見たという思いがあります。無論、そこに抵抗としての内なるアジア、日本のなかにあるアジアが誤りも含んでいたことは確かです。もっとも、水俣も成田も向こうからやって来る政治としてだけ成立していたのではなくて、こちらから政治を呼び込む、取り込むという方向性もありました。これは石牟礼道子が明確にいろいろなかたちで表現しているように、支援者がそこに登場して来るから

です。それは内なる抵抗としてのアジアというものを竹内的に見通すことによって、強い共感を抱いた私のような世代が水俣まで出かけて行く、先ほど、「隠岐島コミュン」について松本さんが自分のお仕事としてあげられました。これは私自身、肯定すべき仕事として、すばらしいものだと思いますながら、一方で、松本さんに、こちらから出かけて行くという姿勢を感じました。

実は私は、かつての60年代、こちらから出かけて行くという支援者のなかから、新左翼運動の大きな挫折があったと考えています。その点を石牟礼道子がいろいろな表現形式で、きちんと読み込んでいます。

支援者が持ってきた宣伝文書は新聞紙にも足りない、新聞紙であればトイレでお尻をふく紙の代わりになるけれども、支援者の持ってくる宣伝ビラはインクがたくさん付いていてお尻をふくとインクが付いてしまう、おまけに一般の水俣の漁民がトイレで使う新聞紙は何となく見ることで得る知識がある、その足しにもならないという表現で、いわば揶揄しているわけです。それ自体は非常に愛情をもって揶揄しているのですが、しかし、そこにある種の本質が見え隠れしています。つまり、水俣の漁民は自分たちの生活、命そのものが篡奪されていく、奪われていく、だからあれこれと言葉は必要ないのです。とにかく立ち上がらなければどうしようもないということです。

実は中国のなかで、竹内が見ていた中国の老百姓（ラオバイシン：庶民）たちは、文字どおりそういう状況にあったわけです。だから、その構造は、別の言い方をすれば、政治が向こうからやって来る、それに対して抵抗を余儀なくされる人々、それとこちらから、それに胸を打たれて支援していく人たち、中国で言えば、共産党も含めて党派のようなものでしょうか。そこにある種の老百姓と共産党、党派の問題が構図として浮かび上がります。それは革命後に大きな問題として事態を動かすことになっていくわけです。



今、一番大きな問題は、中国では、向こうからやってくる政治に迫られて抵抗する人たちが、私たちの知らない範囲でものごとく多く現れています。しかし、それは事態を変える力にはなっていません。おそらく、一定の力をもつことにはなるでしょう。しかし、歴史を繰り返すわけにはいきません。そこに支援者が現れ、党派的なかたちでかかわることが、私たちの敗北を持続するという竹内の方法を破綻させたのです。敗北を持続し、抵抗を持続させる枠組みを破綻させたという問題の立て方が、文学のなかで「言葉の無力を知りつつ、言葉に力を持ち得ないことを知りつつ、真切一片の言葉を発する」という竹内の表現、その真切一片の言葉は、実はインテリゲンチヤにしかできないのです。本当は、老百姓にはできないのです。竹内と丸山の違いは、丸山は向こうからやってくる政治に迫られて抵抗する民衆の立場に立ちながら、「真切一片の言葉を吐く」、そういうたぐいのインテリゲンチヤにはなり得なかったということです。先ほど、鶴見さんはインテリは駄目だと、日本のインテリは駄目だとおっしゃいました。

実は、そうした「真切一片の言葉を吐く」ということの難しさ、普通のインテリにはそれができません。支援者の言葉であれば発することができます。

しかし、そうではない言葉をもう一度取り返すことができるかどうかという問題です。話が抽象的だというご批判もありました。しかし、実はこうした社会、真切一片の言葉を簡単に吐くことが

できなくて、支援者にもなれない、つまりこちらから政治を取り込んでいくことによって手痛い打撃を被った団塊の世代、私は団塊の世代より少し先行する世代ですが、私たちはかつてのように、容易に自分たちを支援者にすることはできません。それはもっとも先鋭的な現れ方をしたのはアラブ赤軍です。アラブ赤軍は国外まで出かけていきました。しかし、結果的にそれが手痛い打撃を被ったことは明確です。

ではいったいどのような方法があるのでしょうか。私は文化大革命についてもお話ししたいのですが、文化大革命の問題は根本的にそうです。青年紅衛兵造反派、そうした党派や自分たちが庶民側にいるのだと言いながら、実はそこに党派の論理を持ち込んでしまったのです。

それは彼らが政治をこちらからつかんでいこうとしたからです。つまり、向こうからやってくる政治を守るものとして、抵抗するものとして政治に参画したわけではないのです。紅衛兵や造反派の手痛い失敗につながっているというのが、私の文化大革命研究の暫定的な結論です。長くなりまして申しわけありません。

●—司会 はい、なかなかまとめに向かうというのは難しいですが。

●—松本 加々美さんの意見に抵抗するわけではありませんが、私が隠岐の島に出かけて行くという発想自体に1つの問題があるとおっしゃいました。ただ、例えば、今日の話のなかで「隠岐島コミューン」についての人民側の文献がないと竹内さんが言ったと言いました。ところが、E・H・ノーマンは「コミューン」という言葉を使っていません。「隠岐騒動」「隠岐暴動」あるいは「隠岐の島における事件は日本の近代史の縮図である」と言っています。マイナスの暴動とか騒動なのです。『隠岐島誌』という昭和10年代に出た本のなかにも「隠岐暴動」「隠岐騒動」となっています。これを竹内さんの言語感覚で言うと、民衆が自分たちの「自治政府」(コミューン)をつくり、81日

間徳川幕府と戦って、そのあと明治政府の軍隊も追い返して「コミューン」と捉えます。結局、その戦争で負けてしまうわけですが、支配者及び学者は、これを暴動と言います。自分たちが学校を持ちたいという基本的な発想なのです。学校を持って自分たち教育をして、世界のことを知って、自分たちの島を守りたいというパトリオティズム(patriotism)です。これを徳川幕府からも明治政府からも暴動と言われて、E・H・ノーマンからもそう言われてきました。自分たちの郷土史でも「隠岐暴動」「隠岐騒動」と書いてあります。

竹内好さんが「隠岐コミューン」という言葉を使ったら、これは民衆の自立、自治の表れてあるととらえたわけです。このことは誰かが伝えなければなりません。

私はインテリだと思っているわけではありませんが、このことを知った知識人とすれば、このような考え方があることを伝えなければなりません。現在、隠岐の島の人々は誇りの事件と、自分たち島民の誇りの事件だと、ここにわれわれのアイデンティティーがある、と現在30歳代くらいの人が思い始めています。

このようなことは、出かけて行く意識であってもやったほうがいいのではないのでしょうか。竹内さんが、そこで言葉を変換してくれたわけです。言葉は無力ですが、言葉はまた何事かをなし得えます。世界を変え、民衆の意識を変えることも言葉の役割だと思っています。

●—司会 では、若い順番に、岡山さん、宿題も含めて一言お願いします。

●—岡山 最後のセッションでは、「歴史」という言葉について、非常に考えさせられました。松本先生の話、孫歌先生の話でそれぞれが使っている「歴史」という言葉の意味を、お二人の発言を続けて聞くことで、余計に意識させられました。そして、今、自分のいる歴史的な場所の意味や問題をとらえることが、いかに難しいことかということをおぼろげに思いました。

また、加々美先生のお話のなかにあった言葉で、竹内の提出した問題が意識化されないほどに日本における思考がドレイ化している、あるいは抵抗としてのアジアという問いが薄れているという現在の状況に対して、竹内を内面的に理解していくという理解の仕方だけではなく、更に進んでもう1つ何ができるのかという言葉が、非常に心に残りました。

今日、フロアの皆さまから出たコメントや質問のなかには、文化大革命をどのように理解するか、実際の民主主義の問題、憲法の問題をどのように理解するかなどという具体的な問題を考えていく手がかりを探っておられるものが多くありました。竹内を考える際にも、文学的、内面的な理解をしつつ、具体的な問題と常に往復関係で考えていくことが、先ほど申し上げた、自分のいる歴史的な場所の問題をとらえることにつながっていくと考えます。そして、そうした思考の積み重ねが、意識化されないほどなだらかに抵抗としてのアジアという問いの薄れた現在の状況に対して、その問いをとらえ直す力を育てていく試みになるのではないかと思います。この問いをとらえ直して生かしていく可能性はごくわずかかもしれないし、実は可能性があると考えていいのかどうかさえわからないようなところに追い込まれているのかもしれないかもしれませんが、それを考え続けていくことの必要性を改めて考えさせられました。

●一司会 ありがとうございます。菅さん、一言お願いできますでしょうか。



●一菅 いくつか申し上げたいことがあります。フロアから抽象的であるというご批判がありましたのでひとこと申し上げます。具体的に身を寄せながら議論をすることはなすべきであり、また可能であっても、昨日から今日にかけてのテーマが個別の具体性のなかにとどまるということはありません。そのことはご承知おき願いたいと思います。

役にも立たない抽象論にとどまって、くだらないことばかり言っているのが日本のインテリだという鶴見さんのお話は、おそらくそういうことにもかかわってくるのではないかと思います。

その点については、インテリの端くれかもしれないので忸怩たる部分があります。しかし、やはりそうおっしゃっている鶴見さんは大インテリなわけであって、そのパラドックスを生きていらっしゃるわけですから、忸怩たるものがありながら、インテリの端くれは、やはりそういうことをするしかありません。

ある意味では、竹内好もそうだったのではないかと、砂をかむような苦渋をなめながらやっていたのではないかと思います。ということ、一応、鶴見さんにはお返ししておきたいと思います。

そのことと、先ほど出ていました民主主義が関わってきます。民主主義が徹底すればするだけ大衆が主人公になるわけです。それは、制度としての民主主義が完成しているにもかかわらず、大衆が駄目だったらどうなってしまうのだろうという問題につながります。そうなってしまう可能性もあるわけです。

私は、理想の形態は、完全に大衆へ、とことん底まで降りた大衆が主権者となって登場してくる民主主義であろうと思っています。しかし、自治能力に欠け操作された大衆が制度上で権力をもって民主主義を実施すると、とんでもないことになるということは歴史が証明しています。文化大革命もそうだった。ナチス・ドイツが典型的にそうです。繰り返し繰り返し歴史のなかで現れてくる

ポピュリズム (populism: 大衆迎合主義)。その可能性を排除できないから民主主義が制度として実現されればいいということにはなりません。にもかかわらず大衆の主権を選ぶ、にもかかわらず民主主義を選ぶと言わないとどうしようもないのです。反対側から出てくるのは賢人政治あるいは独裁です。これでは大衆の未来はありません。自分もその一役を担う駄目な大衆の側に賭けるというかたちで問題を立てないと、一瞬にして希望は消滅してしまうので、それだけはとらないと私は考えています。天皇制反対というのはそこにかかわってくるのであって、竹内さんのモチーフも別のことではなかったでしょう。

文化大革命全否定というわけにいかないのは、その部分にかかわってくるからです。確かに最初は、毛沢東の提起で始まった面はありますが、大衆によって提起された問題は、加々美さんもおっしゃっているように、1つも終わっていません。またそのことについては、これから取り組んでいかなければいけないということは、決して中国だけの問題ではありません。痛烈に批判された権威主義の問題とか、ブルジョア制の問題とか、実権派の問題などは、実は日本社会の問題でもあるわけです。

一方的独裁は否定できても、大衆の決定という側面についてはもしかしたらポール・ポトも100%全否定できないかもしれないという思いさえあります。あのような権力が出てきたらたまりません。それはそうですが、大衆が過ちを犯し、そこから学ぶ権利を奪うことはできないのです。その点で、薛毅さんがおっしゃっていたことはとても重要だなと思います。暴力論の問題を出されて、大衆の暴力と、権力の暴力を分けて考える必要があるということをおっしゃいました。本当はもう少しその先をうかがいたかったと思います。決して、ヴァルター・ベンヤミン (Walter Benjamin) 風の暴力論で簡単に片が付くこととは思いませんが、薛毅さんの報告には含蓄があったと思います。

憲法についても何度かフロアから話が出ました。恥ずかしながら新しい憲法は通読しましたが、古い憲法を必要と思った部分だけしか読んでいません。私は、憲法については、松本さんと少し意見が違います。できることならば自主憲法であることが望ましいですが、大事なの中身だと思えます。中身は圧倒的に戦前の憲法より戦後の憲法のほうが良くなっています。政府は占領軍に押しつけられたのですが、人々はそれを喜んだではありませんか。一章はダメだという大きな問題がありますが、そのほかはこのときの感覚を大事にすべきだと思います。今、変えていったい誰の得になるのだろうか、という点から考えるべきであって、内容ぬきで自主憲法かどうかということを考えるべきではありません。

後先になりましたが、先ほどの大衆というテーマに関してのことです。失敗に失敗を重ねながら変わっていく大衆の一翼に自分の身を置いて、それに賭けようというのが、もしかしたら竹内好の敗北を重ねるなかで教訓を得る永久革命ということにつながっているのではないかと思います。もともと竹内好を読み始めたときのテーマは、1つは戦争責任の問題、もう1つは天皇制の問題でした。その点で、彼の書いた本を読んでいくうちに、戦争責任を総括できない日本人のドレイ根性、日本人の近代の在り方ということが明らかになってきます。ドレイ根性というのは、大衆における天皇という統合軸の内面化、つまり一木一草に天皇制があるということとかかわっていくことなので、その部分は、民主主義の問題とかかわっており、またそこから永久革命の問題を考えるのが、竹内好に学ぶことだろうと思います。

さいごに1つ。私が一貫してひっかかっていたことがあります。それは竹内が朝鮮に言及することがほとんどないということです。竹内好を読んでいくなかで、これはいかがなものかということを感じました。尹健次氏が、そういうことを菅が書いているということ引用してくれて、日本人

はあまり感じないけれど、韓国・朝鮮の人は気になるのだなとあらためて思いました。何がバリアになって朝鮮について彼は言及しなかったのかということが、いまだによくわからないのです。わかっている人がいたら教えて欲しいと思っています。

●一司会 どうもありがとうございました。溝口さん、鶴見さん、よろしいですか。

●一溝口 今日は徹頭徹尾、地方自治でいきます。中国との付き合い方についての角度からお話したいと思います。

先ほど、日本の地方自治は、江戸時代の場合には、村単位で庄屋を中心にした自治でした。中国の場合は、日本で言えば藩くらいの規模になります。実際の自治活動も、日本の自治活動が冠婚葬祭を中心に行っているのに対して、例えば、広東省の南海県では、第二次アヘン戦争（1848年）のころ、イギリス軍と戦うために、団練という自衛組織が民間でつくられて、砲台、運河など防衛のためのすべての費用は民間から拠出されて自発的に戦争をしています。日本で言えば、薩英戦争を民間で引き受けてやっているようなものです。そのぐらい規模の大きな自治です。だから、辛亥革命の段階で権力を握るところまでいくわけです。

例えば、日本では悪いことをして捕まって罰せられるのは一連のことです。ところが中国の場合は、悪いことをしても運の悪い者が捕まります。さらに運の悪い者が罰せられるというすき間だらけです。しかし、一方では、南海県の事例のように自分たちで戦争も請け負ってしまうという全体のスケール、空間の大きさが違いますので、中国と付き合い方場合には、日本の感覚で付き合い合わないことが必要だということを申し上げたいと思います。どうも失礼しました。

●一鶴見 溝口さんの話で、中国史の長い脈絡のなかで魯迅を見るとどうなるかということをお教えられました。驚くべき新知識を獲得しました。いままでは、中国史のなかで魯迅はどうであるか、

ということは一切発言してきませんでした。今日の溝口さんの話で納得しました。つまり、魯迅の見えなかった部分がどのようなものか、同時に私は、魯迅の翻訳図書を、昭和10年くらいから『阿Q正伝』を読んでいました。竹内好以前です。

自分で面白いと思っていたものを、戦後になって竹内好の評論を読んで、初めてその意味の解明ができました。そして、『魯迅』を含めて竹内好の評論を、われわれの時代の日本の知識人が書いてきた文章に対する批判として、まったく正当なものだと思いました。

最初に読んだのは、「中国人の抗戦意識と日本人の道徳意識」です。素晴らしいものでした。私は軍隊にいたので非常に当たっていると思いました。その次に「指導者意識」です。これも非常に感心しました。何となく自分が偉いようなふうにもを書いているのです。嫌になってしまいました。私は同時代の日本の知識人の書いた評論、文章としても竹内好は抜群だと思いました。

ですから、日本の脈絡のなかで、竹内好の活動を見ていて、今もその評価は撤回する必要はないと思います。依然として日本の知識人は墮落に墮落を重ねています。政治家はだいたい知識人の成れの果ての恥知らずの姿です。とにかく、不幸なことですが、さらにさらに竹内好の評論は当たっていると思います。そういうふうに考えています。

竹内好がつくりだした世界は、魑魅魍魎を含めるといような不思議な世界です。竹内好は自分で玉を掘り出していたのですが、それはあまり評価されていません。それは知識人の持っている欧米の学術をそのまま直訳して、日本語のように見えますが、実はヨーロッパ語です。それをよくわかっていないのです。そういうものとして操作しているので根がないのです。しかし、日本語のそのものは二千年の長さをもっています。万葉集から、風土記から来ている大変なものなのです。万葉集を読んで、聞いてわかるのですから。イギリス語、フランス語より深い歴史を持っています。

今もそれは生きているのです。なぜそれを生かさないのでしょうか。そこに日本の知識人がおこなっている平和運動とか、反戦運動が、すぐにあがってしまうという感じがあります。そこが面白くありません。

今の憲法がどうかというと、今の憲法はアメリカ語で読んだほうがよくわかります。そういう限界を持っています。むしろ日常語から考えていかなければ駄目ではないでしょうか。

そして、原爆を2つ落とされた日本人として言いたいことのなかに、反戦、平和というものがありまして、そこから考えていくと、「九条の会」は守ったほうが良いということになります。

ヨーロッパの法律や歴史からではないのです。アメリカの落とされた2つの原爆がどのような意味を持っているのか、それを落とされた日本人としていったいどうするのか、それを普通の言葉で言いたいと思います。「あれは相当ひどいね」ということを、普通の言葉で言いたいです。別に知識人の用語でもないし、何と言うことはないのです。

私は、15歳から19歳までの自分の考えを見れば、一度日本語を失っていますから。アメリカのほうが自分の自然にかなっています。しかし、私は無理してアメリカ語から離れました。そして、日本人の知識人の悪口を言っているのは、日本の知識人が東京大学よりハーバード大学のほうが上だと、戦争が終わってから気が付いてそう思っているのです。そして番付意識を持っています。このようなものを破壊したいと思います。

私は断じてハーバード会には入りません。私はハーバード大学で受けたことよりも日米開戦のあと、監獄に入って、そこで見聞きしたこと、監獄のなかで使う日常語、殺人犯と一対一で話をするなんて絶好の教育の機会です。そんなものがハーバード大学で得られるわけがありません。この殺人犯はプロボクサーでした。もう一人プロレスラーもいました。その二人のプロはけんかがおこってもじっと見えています。参加もしません。仲

裁もしません。その単純な情景は、原爆が世界のなかで戦争が終わったときに、原爆を原爆をもっていない者の上におとすということを抑制する立場です。

私はすべてそのようにおとぎ話に翻訳して理解して納得できるだけでいきたいと思っています。それはもうろくしている自分の段階にふさわしいからです。私はおとぎ話に翻訳できる以外のことは言わないし書きません。それによって生きます。そうしたら、今よりももっともうろくしても、まだ反戦運動のために生きることができるでしょう。

私の理想の人は、竹内好を超えて山下清です。彼を理想として生きます。彼は戦中も戦後も変わっていませんから。それが私の理想で、その考え方から九条を守ったほうが良いではないか、という立場に立っています。

●—司会 ありがとうございます。まとめは主催者側からやっていただきたいと思いますので、加々美さんに代わります。

●—加々美 そろそろ時間がまいりましたので、総合討論はこれで終えて、閉会のあいさつに移りたいと思います。高橋さんお願いします。

●—総合司会（高橋） 昨日から2日間、ほぼ休む間もなく熱心にご聴講いただきました。また、壇上にいらっしゃる10名の先生方には大変お世話になりました。皆さま、どうぞ拍手をお送りください。どうもありがとうございました。

2日間のシンポジウムを通じて、私自身も質問したいことが多々ありましたが、じっとこらえて我慢をしていました。会場の方にぜひともいろいろなことを、思いの丈を述べていただきたいし、またご質問していただきたいという気持ちもありました。

ただ感想を申しますと、思想家、文学者はすごく難しい話をするものだなということを痛烈に感じました。私は経済学を専門としておりますので、もっと単刀直入に単純化していくのがひとつの仕

事です。しかし、このように複雑化してお話しなさることのなかに真理があって、黒川さんがまとめは主催者側でと言われましたが、これはまとまらない話だと思います。むしろ、まとまらないほうがいいと私は思います。

まとめますと、おそらく矮小化されてつまらない話になってしまうと思いますので、ここはぜひ聞き流していただいて、いずれこのCOEプログラムのリーダーの加々美先生がそれなりに取捨選択されてまとめられることを期待しております。

ぜひ今日のシンポジウムが、私どものCOEプログラムの次なる発展のために大いに役立つことを期待しておりますし、また皆さま方も先生方の話を聴かれて若返られた方もいらっしゃるでしょうし、20年前、30年前にタイムスリップして戻られた方もいらっしゃるかと思います。私どもとしてはこの2日間を、大変貴重な機会だと受け止めています。この機会を、今後始まるCOE第2期に生かしていきたいと思っています。皆さま方、今後ともぜひよろしく願いいたします。どうもありがとうございました。

●—加々美 すみません。最後のあいさつを副学長の代わりにしなければいけないということで予定していました。ただ、そんな話を長々とする必要はありません。

だいたい文部科学省から補助金の出ているCOEプログラムで、このような類のシンポジウムをおこなうことができるというのは、自分でもどこかこそばゆいという感じです。お上からいただいたお金で、抵抗とか何とかを論じ合うというのは、これがずいぶん長い間竹中労とやっていた「風の会」でやるのであればわかるのですが、COEでやるということは、ある意味では奇妙奇天烈で、しかし、そういう意味では、お上に感謝しなければ。

●—溝口 いや、これは国民の税金ですよ。(笑)

●—加々美 そうですね。国民の税金ですから国

民に戻す、そういう意味ではまったく正しいですね。ただ、どうもお上からもらっているという観念が働いてしまうものですから、正されて大変うれしく思います。誤りを正します。

いずれにしても、そういう意味では、全国のCOEを見ていただくと、まったくそういうことはありませんし、また鶴見さんがおっしゃったように、ノーベル賞を日本に30人生み出すためにいろいろな科研費やCOEやら莫大なお金が文科省からおりています。このような類のことがまっとうなことなのか、という問題があって、しかし私はいただいています。ものすごく自己矛盾も感じますが、それにしても自己矛盾のなかで始めていて、この問題も自己矛盾だから議論してもらったらよかったです。はじめに申しましたように、うれしくてワクワクしながらこのシンポジウムを始めました。実は終わっても少しも疲れませんでした。会いたい人、顔を見たい人、話をしたい人、みんなに会えたということで、こんなにうれしいシンポジウムはありません。

少し挑発をして火花を散らしたいという気持ちがありましたが、松本さんはあまり乗っていただけなかったようです。菅さんもうまく身をかわしたという感じがあります。ほかに、喧嘩をさせたかったのは、孫歌さんと松本さんとか、孫歌さんと菅さんとか、ほかの中国の方からと、それから岡山さんにも、誰かかみつく人がいてほしかったです。皆さん、岡山さんを大切な人だと思っています。あまり大切だからと言って変な愛情があるわけではありませんよ。それだけはどうぞ誤解のないように。

ただ、私どものCOEのなかでは、岡山さんはこれから先いろいろなものを出してもらいたい女性の研究者であります。

本当に今日はどうもありがとうございました。お疲れさまでした。